イタリア的性格：マリア・ジュゼッピーナ・グラッソ・カンニッツォ

「ANM邸」設計＝マリア・ジュゼッピーナ・グラッソ・カンニッツォ

家庭性の亡霊 フランチェスコ・ダルコ

参照｜本誌pp.4-29

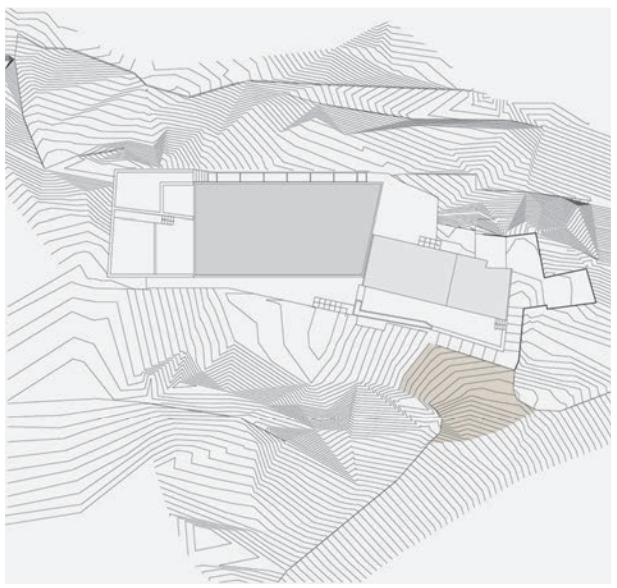
モディカに戻るべきたくさんの、そして最上の理由がある。1693年に大地震がノート渓谷を襲い、シチリア東部を荒廃させた後、町の相貌は大きく変わった。それでも非常に古い歴史の痕跡が生き生きと残されている。壮麗なバロック建築に取り囲まれた旧市街では、洞窟群を囲むように都市が形づくられている。数世紀の間に、洞窟は人々の住居となって変化をとげ、唯一無二の環境が生まれた。山々の地形を目で追うと、景色が刻々と変化する。ただし自然の美に加えて、モディカに帰るよう促す理由はほかにもある。本稿で取り上げる住宅の建築主、アントニーノ・ニカストロがそうしようと決めたことこそ、その証左だ。

モディカ市の縁に古い農家がある。年月を経て家畜小屋も建てられた。ニカストロ家は小屋をさまざまな動物の飼育に使ったが、農家は祝宴の場に変わった。建物の周囲には、渓谷一帯に人々が入植した典型的な痕跡である乾式の石壁が、かつても今も、丘の斜面に沿って巡らされている。その斜面を切り取るように、2つのヴォリュームが建てられた。隣り合っているが、用途の違いと中庭によって明確に分けられている。モディカの記憶と愛着に心を動かされたニカストロは、荒れ果てたこれらの建物を自邸に改変しようと決心し、その設計をマリア・ジュゼッピーナ・グラッソ・カンニッツォに依頼した。

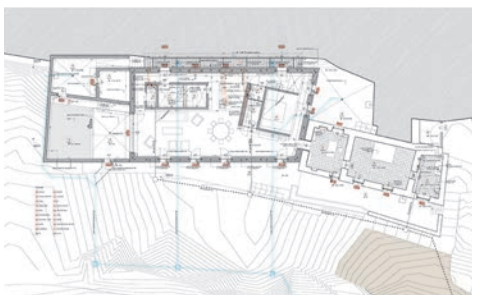
背後の丘より見る

新築棟（左）と既存棟（右）の関係

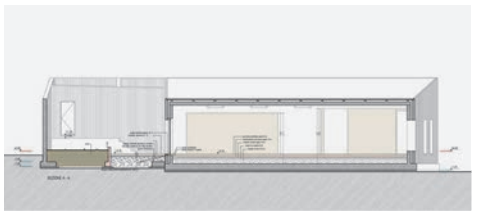
家畜小屋に備わる基礎は、石造の基壇にしっかりと打ち込まれた住宅と異なり、不安定という以上に脆いことが判明すると、グラッソ・カンニッツォは2つ別の道を選ぶべきと考えた。彼女は住宅の修復に取り掛かり、外被は清掃のみで、端の部分だけ修理した。続いて、住宅に横付けするかたちで、家畜小屋の跡地にもとの寸法を借用した直線的なヴォリュームを建てた。2つのヴォリュームの輪郭の並びをわずかにずらすことによって、両者を隔てる距離として連絡階を造形し、異なる建材の使用から生じる不調和を強調することが提案された。こうして生まれた建物を垂直に切り取る影線は、二重の機能を帯びる。すなわち、この建物を構成する2部分の異なる起源を際立たせ、かといって不和を強調することなく、建物がともに南南西を向くことで生まれる平板化の影響を遮断する。こうして引かれた影の線に、新しい建物のファサードが重なる。それは5つの垂直の開口部で中断された連続する平面である。ファサードの直線性、開口部のある壁の造形、それらと閉じた壁との関係からは、建物が不等辺四辺形に設定されているとは直感的に分からない。ところが、背後の丘に登り、斜めから見ると明確になる。また、その四辺形の幾何学形態を起点に平面図がデザインされたことで空間的充足感が得られるため、屋内からはより一層明瞭に認識できる。切り石で作られた住宅の外被を整備し、蜘蛛の巣のようにはみ出たモルタルを取り除く決定が下されると、新しい建物が形づくられた。グラッソ・カンニッツォが狙いを定めたのは、すでに見た、2つのファサードの間に挿入された縦の切り込みによって強調された間隙である。現に彼女は、鉄筋コンクリートでモノリスのように建てられた単一ヴォリュームの内部に、住宅の新たな空間を置くことを決めた。周壁は片流れ屋根の下端まで続いている。周壁は、同時に打設された鉄筋コンクリートの壁板2枚の間に断熱材を入れて袋状に造られ、厚みが約40cmの壁体となる。幅15cmほどの再利用木材を使って、型枠が準備された。型枠用の木製パネルはブラ



配置図



1階平面図



断面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©2020 ArchitectsStudio Japan

シをかけてから、打ち放しコンクリートの間仕切壁を建てる際に複数回利用された。ただし、屋内の壁は断熱材を入れないため、はるかに薄い。コンクリートの混合物に着色剤を加えて、壁と地表を均した基壇とに使われた石の色味と調和させた。新築ヴォリュームと既存の建物を調和させる配慮から生まれたのは、この色調に関わる決定と、ファサードの高さを、修復された農家の軒線に合わせる決定だけである。既存の建物には、切り石から生まれた不規則な波紋が表れるのに対して、新しい外被の表面には、型枠に使われた、カンナをかけていない板を一列に並べた跡がついている。そこから生まれた2つのデザインは、別々の文化と時代に属する建設技術を端的に表現する。一方は有機的で不規則、他方は反復的で幾何学的である。新しい外被は垂直の模様の連続によってほぼ標準化されているが、古い外被は石を水平に並べた不安定な列によってデザインされている。新しいファサードの造形に使われた技術の幅は限定されている。ただしそれらを表面的に見るだけならば最小限と呼べるかもしれないが、この形容詞はグラッソ・カンニッツォの表現方法に対して、ほとんど何も言っていないに等しい。彼女の仕事の独創性は、建設材料が彼女の空間構想の副次的でない構成要素として用いられる際の、一貫性と厳密さにあることが再確認された。他の作品以上に本作では、グラッソ・カンニッツォは自分を駆り立てたと思われる確信を証明した。それによると、設計のあらゆる解は、フォルム決めと建設技術の決定が合致した時に実現される。その証拠となるのが彼女の採用した解であり、この合致から洗練された優美さが引き出されることだ。そこで、ページの割り付けのように新しい建築の構成を整理するためだけに、ある記号が採用された。メイン・ファサードの最長部分には、住宅内に光を引き入れる4つの開口部と同じ高さの型枠が使われた。開口部には基礎より高い位置に敷居がつけられたが、楣式構造とコーニスはない。彫刻道具を使って、デザイン画を壁面に転写したようだ。建具のデザインと相乗効果をなすこの切り口は、その味気ないほどの正確さによってファサード全体の秩序を打ち立てる。浮き出た1本の線がファサードを水平に横切り、上層部を分離している。すると、屋根を支える1本の連続したビームにも見えてくる。この線は、2段階の打設でコンクリート壁を建てるという決定から生まれた。最初に打設する壁の高さが開口部の高さと同じだからである。2回めの打設では、不可避的にコンクリートが滴り落ち、ケロイド状に固まる。後に調整を加えれば、ファサードを横断しそこに韻律を定着させる直線の浮き彫りが物質性を帯びる。ただしこの線は、基壇からファサードを見た時に左手の端部にある、もう1本の亀裂にぶつかって途切れる。この亀裂は、居住空間が置かれたヴォリュームの内壁と重なり、連結されている。その先には5つめの開口部があるが、これは屋内空間への入口ではなく、壁に囲まれた庭へのアクセス口となる。上述したコンクリートの線の中断によって、この機能的な差異が形態的に強調される。一方、壁の厚みが減ることによって、予想もしなかった閉じられた庭（ホルトゥス・コンクルスス）の限定的な空間性が予告される。時の止まったような雰囲気が庭に充満し、影が広がる。反対に、住宅内部は日中のほとんどの時間に4つの開口部から自然光が射し込み、隅々までいきわたる。

1本のオリーブの老木が存在感を放つ中庭――その迷宮を思わせる構成は庭に属する多様な機能を表す――から、階段にアクセスできる。片側を壁で区切られた階段を上ると、所有地の一番標高の高い部分まで行け

アプローチより見る

既存棟裏の中庭

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©2020 ArchitectsStudio Japan

イタリア的性格：オンサイトスタジオ

「ピレッリ本部ビル」設計＝オンサイトスタジオ

洗練された優美 カミッロ・マーニ

参照｜本誌pp.30-41

ピレッリとビコッカはミラノにとって揺るぎなき二項式である。工業時代が終わった今日、ビコッカ地区の中核に聳えるピレッリ社の本部は、少しずつ、生産施設からサービス産業施設に置換されている。このプロセスの最後のピースとなるのが、「ビルディング・チントゥラート」（タイヤのトレッド名を指すことは明らかだ）と名付けられた建物である。ジャンカルロ・フロリディとアンジェロ・ルナーティが設立したオンサイトスタジオによる設計で、2016年の設計競技に優勝した成果である。

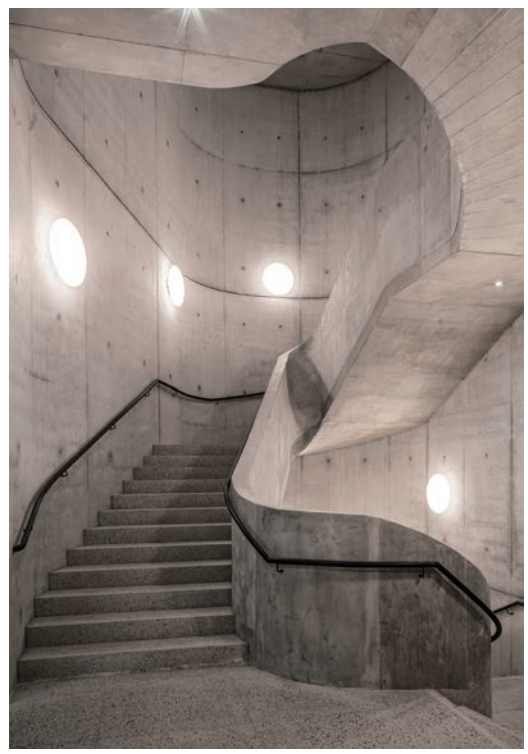
幹線道路のサルカ大通りに沿って建つ新築のビルは、既存の異種混交的な都市構造に組み入れられた。例えば現在ピレッリ財団にコンバージョンされた小さな工場、アルチンボルディ家が15世紀に建てたビコッカの小邸宅とその優美で歴史ある庭園、ヴィットリオ・グレゴッティが実現した冷却塔（『CASABELLA』690号、747号）を含む巨大な建物、さらに近年のオフィス・ビルが複数ある。新築の建物の外側は、外部に対しては3階建てのコンパクトなファサードを見せるが、内に向けては不定形な輪郭を見せる。新しい広場には樹木が植えられ、池が作られた。古い庭園をエリア全体のデザインに組み入れることで、広場は異なる建物どうしを連絡する複雑な屋外空間体系の心臓部となっている。こうして生まれた快適な庭では、性質の異なる建物が共生し、互いに接触することなく、驚くほど調和的な視覚的関係を作り出している。

街路側ファサード

隅部に設けられたエントランス

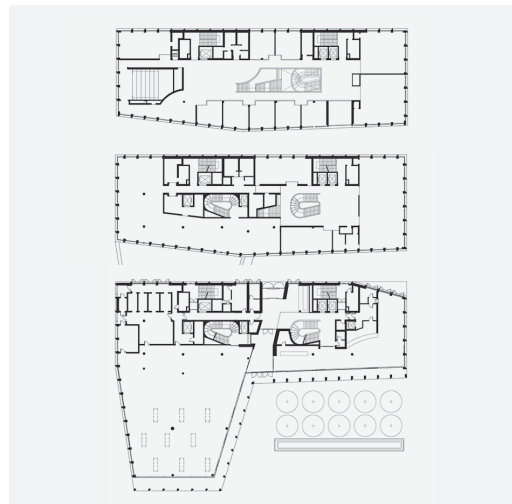
ビルディング・チントゥラートには、ピレッリ全社員向けの諸機能、すなわち福利厚生、社員教育、食事・休憩の部門が置かれた。レストランとカフェが1階と2階の一部を占める。さらに大規模な多機能ホールも付属する。一方、3階は小面積のフレキシブルな空間に充てられた。空間の分配システムは、空間的にも象徴的にも重要性を帯びる。イメージを膨らませる湾曲したフォルムの鉄筋コンクリート階段が2つあり、1階から2階に上ると、トップライト

ディテール



階段室

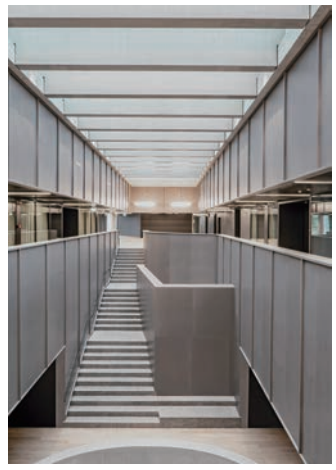
断面図



各階平面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©2020 Architects Studio Japan

プラザより見る



中央ホール「屋内ガレリア」

からの光で照明され吹き抜けになった、中央の大空間に導かれる。直線的な階段でも1層と2層を行き来できるこのホールは、「屋内ガレリア」として機能することによって、動線とすべての空間へのアクセスに人々を向かわせる。光をコントロールし、素材を厳密に使うことによって（床の樫材、グレーのMDFボードの羽目板、柔らかいカーテン、打ち放しコンクリート）、この空間は企業の顔となる空間の厳正な上品さと、より親密でくだけた家庭的性格との間で揺れ動き、好奇心をくすぐる建築的性質を帯びた。

内部は複雑でも建築ヴォリューム自体は左右されない。ヴォリュームはコンパクトですっきりと整理されたままで、熱分布と省エネルギーの観点から明らかに有利である。建物の奥行きは約24mあり、平面は1.5mのモデュールに基づき3つに分けられている。設備ゾーンは騒音の多い道路側に寄せられ、動線が中央部を占める。一方、庭園側にはより重要な機能が置かれた。

このプロジェクトは、立面のデザインにおいても素材やディテールの使い方においても、ファサードの洗練された上品さで際立っている。ファサードのタイポロジーは1つしかない。水平のスラブと垂直の支柱からなるトリリトン構造で、その内側をガラスとコンクリートの大壁面が埋める。この規則の中に、建築家たちは多種多様なバリエーションを挿入した。異なる階高、1階のポルティコ、2階の柱のずらし、エントランスと小さなテラスの2倍のスパン。こうした要素の組み合わせから、厳格であると同時に図式的な単調さとは無縁なファサードにリズムが生まれた。

仕上げは重厚なコンクリート・パネルで施工された。スラブにも柱にも、丸い窪みと幾何学模様の装飾が施された。また幾何学模様の洗練された遊戯によって、一方ではビコッカ・デッリ・アルチンボルディの小邸宅という16世紀建築のコーニス、他方ではタイヤ痕を基にした企業広告の抽象的グラフィックを呼び起こす。ファサードのパネル・デザインに見られるマニアックなまでの精密さ、丸く窪んだ幾何学形態の操作、刻み目装飾のバランスによって、建物は高度な優美さを帯びた。まさにこの設計アプローチには、オンサイトスタジオの作品のクオリティと、節度を保ちつつ、力強く静謐な建築を建設する能力が認められる。そうした建築では、ディテールの豊かさによって建物のフォルムや建設技術上の解が強化されるのだ。

作品：ピレッリ本部ビル

設計：オンサイトスタジオ——Angelo Lunati, Giancarlo Floridi

設計責任者：Michele Miserotti

協働者：Stefano Casula, Filippo Cattapan, Leonardo Chironi, Nicolò De Paoli, Emilio Ellena, Filippo Fagioli, Jo Fonti, Luca Gallizioli, Davide Macchi, Gianpietro Manazza, Ilaria Pisoni; Filippo Cattapan, Jo Fonti, Luca Gallizioli, Chiara Molinari, Samuel Sanchez（設計競技）

構造：SCE project srl

ランドスケープ：Studio Giorgetta

設備・ファサード：Deerns Italia spa

照明：Voltaire sas｜施工：Carron Cav. Angelo spa

建築主：Pirelli & C. spa

規模：延床面積 5,000m²

スケジュール：設計競技 2016年／施工 2017-20年

所在地：viale Sarca 222, 20126 Milano, Italy

イタリア的性格：チアルロ＋ダニエーレ

「ベルジェッジの『灯台』」

設計＝スタジオ・マルコ・チアルロ・アッソチアーティ＋スタジオ・ダニエーレ

今日不可能かもしれないことを、過去が可能にする時

マルコ・ムラッツァーニ

参照｜本誌pp.42-49

マルコ・チアルロは1961年にサヴォナに生まれ、このリグーリア地方都市の周辺に作品の大半を実現した。筆者は2011年にエレクタ社から出版した彼のモノグラフでそれらを紹介している。この本の副題は「建築、場、ランドスケープ」とした。その意図は、ヴァル・ボルミダ——アルプス山脈がリグーリア・アペニン山脈につながる地点——にあるガラス産業で有名なアルターレという町に暮らし、仕事をしているチアルロにとって、あらゆるプロジェクトとは、何よりもまず人工的か否かを問わず環境が彼に示唆するものの転写であることを明らかにするためだ。

これはチアルロが一貫して深めてきた傾向であるため、彼がカルロ・スカルパ作品との出会いに多くを負っている——ただし、模範とすべき参照源としてではなく、あらゆる既存物と批評＝解釈の方法で対決する必要性の証拠として——と繰り返し言明しても驚きはしない。筆者には、この姿勢が本稿で紹介する作品にも再び見出せるように思われる。本作はベルジェッジの海岸線に並ぶ断崖のひとつという特別な場所に聳えている。断崖にへばりつくように古い集落ができている。断崖の先は広い湾と地中海に洗われた細長い入り江になっている。今はベルジェッジの無料海水浴場になっている浜辺に、20世紀初頭にミッレリーレ家が波打ち際から数メートル離れたところに1軒のヴィラを建てた。ミッレリーレはサルデーニャの家系だが、リグーリア地方の船団や商人の世界に

戦前のヴィラ・ミッレリーレ

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©2020 ArchitectsStudio Japan

イタリア的性格：ブランビッラ・オルソーニ＋カスティリオーニ

「ペトサン村の夏期高地放牧小屋」

設計＝ブランビッラ・オルソーニ・アルキテッティ・アッソチアーティ＋エウジェニオ・カスティリオーニ

高地に避難場所を求める マッシモ・クルツィ

参照｜本誌pp.70-77

ペトサンのマイエン――アオスタ渓谷では夏期放牧地が山の中腹に位置することからこう呼ばれる――は、ラ・トゥイールの東に位置するコッレ・デッラ・クローチェ高地の麓を南北に走る街道にほぼ平行する、細い道路の両側に小さな家が並んだ集落で構成される。コモ出身の建築家たちが改造した農家の納屋は、集落から少しはみ出て、まるで独立を求めるように西を向いている。かつてこの建物の1階は放牧する動物たちを飼うために使われていた。冬越しのため谷底に降りる前に、夏から秋をこの地で牛や羊に草を食ませて過ごすのだ。2階には羊飼いの住居があった。家畜の発する熱で温められ、軽いトタン屋根で覆われた室内で休息した。これまで農村建築にしばしば見られたように、本作の場合も建物のヴォリュームにはすでに最初から、知恵を絞った解が複数あった。そこには、建物に対する実用主義的なアプローチに導かれ、時代とともに何世代も受け継がれてきた建築知識が役立てられていた。空間構成の面でも施工のレベルでも賢明な解で、仕上げには驚くようなディテールが見られる。アルプスの渓谷地帯は、石と石灰で壁を築く特別な技術で知られているが、本作では、既存の数少ない窓を閉じる精巧な建具にも価値あるディテールが認められる。すべてのアルプス建築と同様に、開口部を設ける際は、熱交換が起きる箇所を最小限に抑えるため、強風があまり吹き付けない側の壁面が選ばれた。本作の木製の洗練された建具を見ると驚かされる。一種のプレファブ工法に、革新的で知的な解が詰め込まれていた。注意深い建築家たちは、新たな建具の製作にこうしたディテールを反復する重要性を即座に理解した。新しい建具は現行の省エネ基準に沿って施工されたが、既存のものと同じ工法が採用された。建具にはガラス戸の外側と内側に板戸がついており、鉄格子は角材で造作された窓枠に直接打ち込まれている。ガラス戸を分割する桟は――パーツごとに簡単に取り外せるよう――乾式で組み立てられた。石壁に直接取り付けた窓枠は、雨水が吹き込まないように框が回されている。板戸の下縁の水切りが取付式ではなく一体化とされたのは、耐久

北側ファサード

東側ファサード

各階平面図／断面模型

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2020 Arnoldo Mondadori Editore
©2020 ArchitectsStudio Japan